

本興寺だより

令和三年
一月
第二一七号

「正月の一日は、日ははじめ、月のはじめ、年のはじめ、春のはじめ・・・これをもてなす人は徳もまさり人に愛される候なり」(宗祖 重須殿女房御返事) 謹んで新春のお喜びを申しあげます。

「一年の計は元旦にあり」といいます。この言葉の由来は、中国の明の時代の学者によつて著されたものですが、その中に「一日の計は晨(しん朝)にあり、一年の計は春にあり、一生の計は勤にあり、一家の計は身にあり」と言葉が続きます。何事も初めに計画を立てることにより日々の生活が充実し、勤勉に働くことにより一生が決まり、健康と正しい行いを保つ中で一家の行く末が決まるということです。人生で欠かせないのは「一日の計」「一年の計」「一生の計」「一家の計」といわれます。

一年の初めは元旦の気持ちの切り替えから始めるのです。前年までに多難なことがあっても・・・元旦は一月一日、元旦は元日の早朝の初日の出を表わします。旦の下の一は地平線。そこから太陽が昇る

ます。家庭環境や体調の急激な変化に見舞われることでもあります。一年間が確実に安全で安泰である確約はありません。

「おかげさまで」という感謝の気持ちの言葉。そのおかげ(陰)とは古くは神仏の偉大なものの陰(かげ)でその庇護(ひご)を受け「福」を頂いていますという意味です。昔の人はそのことを肌で感じていたのです。その心が他人への恩恵の気持ちに広がったのです。年頭に交わす「明けましておめでとぅございませう」という言葉には、過ぎ去った年を無事に超えて新年を迎えることが出来た感謝と、新年もつつがなく過ごせますようにという祈りの気持ちが含まれています。

昭和二十四年に人の年齢が満年齢に一本化されましたが、それ以前は数え歳の年齢が一般的でした。数え歳とは、誕生の時を一歳とし、正月を迎えるたびに年齢を一歳重ねることなので、元旦になると国民が等しく新たな年を重ねることが出来て「おめでとぅ」ということなのです。

日々生きることは、何時も何がしかの悩みや苦労と共存することもあります。心の憂鬱(ゆううつ)が止まない小雨のように続くかも知れません。

大切なのは何時でも心をリセットして自身の生き方を見つめ直すことです。時計の振り子が左右に振幅して規則正しい時を刻むように。

姿です。一年で最初の夜明けの初日の出と共に、年神様は各家に現われ、新年の幕開けになるのだと云われています。

お節料理の一の重にあるかまぼこも元旦の日の出を表わしています。同じく一の重にある、豊作を願う「田作り」、まめに暮らせるように願う「黒豆」、子孫繁栄を願う「数の子」から食するともいわれます。



お節料理は本来は五段重ねでした。上から各お重を数え、二の重には海の幸を焼き物で、三の重には山の幸を煮で、四(与)の重には酔の物を入れまし

た。そして新たな年に家族が力を合わせて努力して、より繁栄するための家運の伸びしろとして、また年神様からの「福」(幸い)を詰めるために五の重は空にしておきました。

災難を避けて幸いを掴み、穏やかに生きるためには、人は自分の努力以外に他からのいろいろな力に左右されることを知っています。重箱の中の大自然からの恵みと神仏のご加護の恩を忘れないようにということなのです。

何事も正面からじっくり受け留めずして感謝を忘れ、「重箱の隅をつつく」生き方に走るなどということでもあると思います。

人間関係が順風の時も逆風が吹き荒れる時もあり

毎日の日の出のように、日々の心の新たな日の出(リセット)の積み重ねが、その都度希望と勇気を引き出してくれます。

仏様は、私達がこの世に全くの白紙で生まれてきたのではなく、皆過去何代にもわたって積み重ねてきた善業や悪業の蓄積を背負って生まれてきていることを忘れてはいけないといわれます。



因果応報(カルマの法則)は厳然として存在するのだと。人を愛せば人から愛され、他人を憎めば人から憎まれる。優越感や劣等感の心を押さえ、自分の行いを見つめて生きよと。一見理不尽に見える運命も過去世の業が引き寄せたもの、自分の心が引き寄せたものが多くあるのだと。善業も悪業もそれが現れるまでに時間差があれども必ず結果は現れるということなのです。

仏様は私達がどんな時でも自己責任の人生を歩み、己の心の中に作られた闇を知れば、そこに運命を転換する光が見えるのだと云われます。

本年は全般的に厳しい年ですが、その上にコロナウイルス感染の拡大で、皆生活に大きな影響と精神的なストレスを余計に受けています。

三毒(怒り、愚痴、貪欲)のウイルスにも、心も体も感染しないように気をつけて過ごしたいものです。本年も宜しくお願い致します。

本興寺住職 中谷 聰 秀 合掌